

月刊

保険診療

Journal of Health Insurance & Medical Practice

2

2010. Feb.

Vol.65 No.2

Ser.No.1446

特集Ⅰ 医療機関を“どう魅せるか” アイデア全集

特集Ⅱ 「2010年4月診療報酬改定」の全貌

～「主要改定項目」を読み解く～



連載特集

2010年診療報酬改定の文脈を読むⅡ

視点「電子点数表の実用化で電子レセプトをデータ処理可能なシステムに」

4 企画、イベントで“どう魅せるか”

1 市民との信頼関係を築く「健康フェスタ」

東京女子医科大学八千代医療センター

八千代医療センターは八千代市民の強い要望を受けて2006年12月に開設された。それもあり、同院では、医療（市内医療施設等）、市民、行政との3つの連携を重視している。

なかでも、市民病院的な立場から、“市民の健康を守る中核病院”として広く認識してもらうため、「健康フェスタ」（写真21）など、地域活動を積極的に展開している。

健康フェスタの開催は、毎年夏と冬の2回。毎回2500～3500人もの住民が参加している。フェスタは病院の屋内外のスペースを使って、4つのブロックで構成される。①屋外イベント（ステージショー、屋台、野菜の直売等）、②ワークショップ（子どものための玩具制作等）、③健康セミナー（講演、健康相談等）、④オープンホスピタル（キャリア教育・体験等）。

オープンホスピタルは医療に関心のある中高生を対象に、医師や看護師、臨床検査技師などの仕事の現場を実際に体験してもらおうというもの（写真22）。健康セミナーでは、「腰痛」のような身近なテーマの会場では人が溢れる盛



▲写真22 ドクターコースのキャリア教育
中高生にも手術着を着てもらい、実際の手術の手順に沿って医療器具に触れるなど臨場感を味わってもらう。

況ぶり。脳年齢・肌年齢・骨密度測定のコナールも列ができる人気だった。

近年は、市のほかの催事と提携するなど、活動場所を院外にも広げている。

特筆すべき動きは、「八千代医療センターを支援する市民の会」の発足だ（2009年4月）。地域の救急医療を担う病院として開設したもの

の、救急患者の急増による医療スタッフの疲弊を懸念した市民が立ち上がり、いわゆるコンビ

ニ受診は控え、診療所の紹介状を持って受診するよう市民に呼びかける活動を行っている。会員はすでに800人に達する。

健康フェスタを中心とした地域活動は、市民との信頼関係を深めるうえで着実に成果を上げているようだ。



▲写真21 健康フェスタのポスター
セミナーのほか、農協の協力による野菜の直売やワークショップなど、フェスタは院内外で展開される。



▲写真23 小児病棟でのバルーンマンのショー

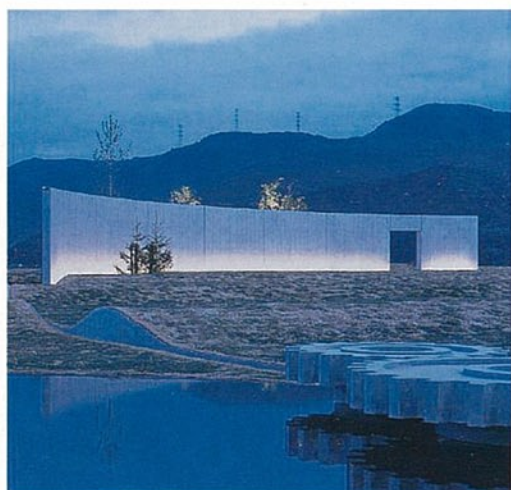
市民ボランティアが医療に積極的に関わっている。

医師や看護師から「動線が長くなるのでは」といった不満の声や、「病棟に死角が生じるのでは」という心配の声も上がったが、カメラ設置による死角の防止策などを講じることで、患者の療養環境を優先させた病棟の実現に至った。

病院建築で常に問題となるのが、建設後に施設基準や社会ニーズが変化しても簡単に建物を変えることができない点である。しかし、同院の場合は、検査室や手術室など移設がしにくい施設をすべて1～2階に集約し、最上階に病棟を集めたことで4床室や個室の変更が容易にできる。さらに、多くの場所に余裕スペースも設けてあり、拡張性が非常に高いため、今後新たなニーズが生まれた場合に迅速に整備が可能である。

医療と建物の関係性が最もよく表われているのが、病院の前に広がる広大なリハビリガーデンである（写真37）。患者が治療を兼ねて歩くことを想定して作られた庭なので、坂道や踏切といった「日常」の環境が用意されている。また、井戸のなかに星が光って見えるなど、「また歩きたい」と思わせる仕掛けも豊富。庭の向こうに広がる山々の眺めは最高で、ここの散歩を励みに頑張る患者さんもいるという。

また、エントランスの外側にはかなり広めの屋根のあるスペースを設けており、非常時には



▲写真37 リハビリガーデンの一部

地面に緩やかな起伏を設け、リハビリに活用。手前は、ガーデン内に設置された丸い池。



▲写真38 エントランスの外側

非常時のトリアージスペースにもなるように設計。

トリアージスペースとしての活用が可能な設計になっている（写真38）。

4 高度な機能性と快適さが調和

東京女子医科大学八千代医療センター

八千代医療センターの建築設計上の特徴を簡潔に言えば、集約化によって急性期病院の機能性を高める一方で、患者向けには癒しと優しさたっぷりの安らぎの空間を演出、ということになるだろう（写真39）。

外来棟1階には感染対策を重視し小児トリアージを設け、重症感染症の疑いがあれば別の出入り口を使用する。子をもつ親には安心な構造だ。画像検査室はCTと血管撮影を一続きの部屋に置き1つの機能に統合。患者にとっても負担が軽い。また、外来・入院の両棟には、それぞれ屋上庭園がある。外来棟の庭園（写真



▲写真39 建物外観

45度の角度を付けた設計で、どの病室からも景色が眺められる。周囲には豊かな植栽と多彩なオブジェが配置され、遊歩道に導かれて散策を楽しめる。

特集 I

医療機関を“どう魅せるか”アイデア全集



▲写真 40 屋上庭園（外来棟）

各所に段差が設けられリハビリに活かせるとともに、中央に配置された台は、リハビリの作業台としても用いられる。

40) は、廊下を隔ててリハビリテーション室の前にあり、単なる憩いの場ではなく、床にスロープや段差を設けるなどリハビリ機能も備えている。

人気が高いのは、小児科外来だろう。全体にパステル色で彩られ、天井には全面に葉っぱが描かれるなど、かわいらしい森のイメージ。診察に対する子どもの恐怖心を忘れさせる雰囲気がある（写真 41）。

工夫はそれだけではない。手術室・ICU のフロアには家族用のアルコールのほか、待合室（3 室）も用意され、宿泊も可能だ。また、4 人用病室には各部屋の廊下側にトイレがあり、ドアは押しても引いても開く作りになっている。



▲写真 41 小児科外来待合室

外来の扉も色分けされ、わかりやすい。子どもたちがくつろげるスペースやギャラリーもある。

開けると自動的に照明が点くなど、細かな点まで便利な作りだ。さらに、広めの廊下には手すりが高低 2 段階え付けられ、バリアフリーも徹底している。

建物周囲の景観のなかに車は少ない。病室からの緑の景観を損ねないように立体式駐車場にしたからだ。しかも、災害時には緊急医療施設として転用できる設計になっている。このように、その意図が隠れてはいても、随所に医療的な配慮や工夫が盛り込まれた患者志向の設計思想は、地域医療の中核病院として市民の安全と安心を支えている。

5 医療者と患者をつなぐ“ボイスプラザ”

社会医療法人財団慈恵会 相澤病院

相澤病院の院内掲示の至る所で案内されている「ボイスプラザ」(写真 42)。一般的な病院でいう「患者図書館」に該当する施設だ。なかには図書はもちろん、インターネットができるパソコン端末も設置されており、患者が好きなときに使える。

病棟では他の患者もいるため、病気のことで医師や看護師、家族らと話しにくいという患者も多い。そんなときにも、ボイスプラザが活用されている。患者同士、あるいは、患者と職員の「ボイス」が行き交う「場（プラザ）」となればいい。——ネーミングには、そんな病院の想いが込められている。



▲写真 42 ボイスプラザ（院内外来 2F）

患者の会話（ボイス）が行き交う場（プラザ）になっている。